



地域で学び、ともに歩む、持続可能な「ともいきコミュニティ」の創造

「地域」と協働し、ともに学びあい、交流と連携を積み重ねる。そして、多様な地域の課題の担い手を創出し、新しい暮らしの豊かさを想像・創造してくことができる人を育成し、社会へ輩出する。

京丹後

総合社会学研究Ⅰ（澤） 京丹後フィールドワーク

地理学的手法を用いて地域の社会課題を調査し、京丹後市でフィールドワークを実施。過疎地の実態を把握し、学生の課題意識を醸成することで、卒業研究につなげることを目的としている。

ゼミ生の多くは大都市に居住しており、過疎地の問題を身近に感じていなかったが、授業を通じて京丹後市の課題が日本全体の課題であると理解を深めた。最終課題では、観光や漁業の活性化など多様なテーマに関心を持ち、解決策を考察した。フィールドワークでは、オーガニック農業を展開するビオ・ラビッツ社を訪問し、地域に根付いた企業経営の魅力や課題を学んだ。また、寒波の影響でジオパーク見学は叶わなかったが、自然環境と地域の暮らしの厳しさを実感した。

与謝野

キャリア基礎ゼミ（舛井） 丹後地域フィールドワーク

実践社会学科で次年度からスタートするプロジェクト演習に向け、地域課題を自分ごととして捉え、活動の意義を考える契機とすることを目的とする。また、地域資源の活用方法を学ぶことも重要な狙いである。

今回のフィールドワークでは、地域への想いや資源の活用方法を学ぶことを目的とし、概ね達成できた。まとめのワークショップでは、地域の魅力や事業への想い、大学生にできることを振り返り、丹後縮緬の新たな取り組みや米作についての話も共有された。山・川・海などの資源の重要性を再認識するグループもあり、地域資源の活用方法への理解が深まった。また、与謝野町の多様な企業や若者向けに工夫された丹後縮緬のビジネスなど、事業への想いにも関心が高まった。

伏見区
向島

向島日本語教室遠足 @ 山城（杉本）

京都文教大学周辺では外国籍市民が増加している。日本語教師養成の学生は、日本語教室の活動と連携し、地域の外国人と共に名所を訪問。交流を通じて日本文化を学び、多文化共生と指導力向上を目指す。

学生と地域在住外国人が日本文化を学び、交流を深める目的は達成された。学生は石清水八幡宮や天ヶ瀬ダムについて分かりやすい日本語で説明し、外国人生徒の質問にも対応した。お正月や初詣について話し合い、外国人生徒は自国の宗教行事や建築物を紹介し合うことで、日本語の語彙や会話を向上させた。参加者からは、今後もこうした機会を継続してほしいとの要望が寄せられ、多文化共生の促進と日本語指導力向上に貢献した。

伏見区
向島

「向島まつり」参画と多文化共生への取組（杉本）

向島ニュータウンは少子高齢化と外国籍住民の増加に伴う課題を抱えるが、向島まつりが住民のまちづくりの中心となっている。学生が祭りに参画し、地域活性化とまちづくりの推進に貢献することを目指す。

向島ニュータウンの外国籍市民と留学生の協力を得て、16か国の文化紹介パネルを作成。写真やクイズを用いし、来場者はクイズに挑戦しながら国旗シールを集めるラリーを楽しんだ。当日は協力者が会場でクイズを出し、故郷の話を紹介。さらに、ベトナムの方がボランティアでスープを提供し、好評を博した。学生と地域住民が交流し、多文化共生を深める機会となった。また、地元FMラジオ局の番組内で、向島まつりを広報し、防災活動の現状と多文化化の現状を共有した。

宇治
久御山

京都府南部地域課題解決（黒宮・舛井・谷崎）

京都文教大学は、京都府南部の政策課題を明らかにし、解決策を提言することを目的とする。公的資料に加え、現地調査や関係者へのヒアリングを通じて、実態を踏まえた政策提言を考案する。

今年度の授業では、受講者を3チームにわけ、宇治市および久御山町が現在抱える政策課題に取り組んだ。宇治市の2チームのうち1チームは、宇治市に訪れる観光客の滞在時間の短さを、もう1チームは新しくできたニンテンドーミュージアムと中宇治地域の回遊をテーマに調査した。久御山町について調査したチームは、昼間人口と夜間人口の差および交通問題に着目し、転入促進政策を考案した。受講生たちは、現地調査の重要性を認識するとともに、地域への理解を深めた。

中丹
山城

「ともいきフェスティバル」出展プロジェクト（黒宮）

実践社会学科の1年次生が、地域企業や団体と協力し、ともいきフェスティバルのブース出展を企画運営。チームでの活動や外部リソースとの連携を学ぶ機会とし、大学と地域の関係強化や今後の連携発展を目指す。

成果報告会では、企画運営の難しさやスケジュール管理の重要性、パートナー団体との連携工夫などの振り返りがあり、今後のプロジェクト運営に向けた導入として一定の成果が得られた。また、多世代との交流を通じて大学生としての役割を見直す機会にもなった。パートナー団体からは「業務を振り返るきっかけになった」「学生の新しい発想が刺激になった」との意見があり、今後の連携強化につながった。教育プログラム開発の試行としても意義深い機会となった。

宇治

観光・地域デザインコース「まぜまぜ超会議」（片山）

観光・地域デザインコースの学生と卒業生が集い、ゼミの成果を発表し、アドバイスを得的交流会。学年間のワークショップを通じて、特に1・2年次生が就業イメージやキャリアモデルを学ぶ機会とする。

ゼミの学びの共有では、2年次生が1年次生の発表内容を高く評価し、相互参照が行われたことが確認できた。先輩との交流による就業イメージやキャリアモデルの理解も深まり、1年次生からは「地域を支える仕事と自身の活動の結びつきを考える機会になった」「就活経験者の話を聞き、将来に向けて何をすべきか考えられた」との意見が寄せられた。学びの発展とキャリア形成の両面で、有意義な交流会となった。

宇治

宇治市連携「西宇治地区小学校跡地活用調査」（舛井）

社会連携の導入として宇治市から依頼のあった北小倉小学校跡地の活用に向けて、子どもたちの遊び場に関するフィールド調査を実施し、フィールド調査の方法について学ぶ。

学生のフィールド調査では、公園の多さを評価しつつ、管理不足や老朽化、若者や子どもの居場所の不足、ボール遊びの制限などの課題が指摘された。また、多くの公園に地蔵があることも報告された。宇治市担当者は、実際の観察が計画立案に重要であるとし、公園の課題を小学校跡地で解決できれば良いとコメント。実践社会学科にとっては、地元・宇治市との初のフィールドワークとして、地域理解が深まる機会となった。

宇治

ウトロフィールドワーク（舛井）

実践社会学科の重視する実践を、事前のイメージと実際のフィールドワークで得た情報の違いから理解し、その重要性に気づくことを目的とする。また、宇治市への理解を深め、「多文化共生」への理解を促進する。

ウトロ地区のフィールドワークの目的は、イメージやインターネットの情報だけでは物事を正しく理解することは難しく、足を運び、自分の目で見ることで認識が大きく変わることを体験的に学ぶことだった。当初学生からは、「なぜウトロで実施するのか」という疑問の声もあったが、「親から近づかないと言われていたが、実際に訪れると雰囲気明るく印象が変わった」などの声があり、フィールドワークの価値と自分で確かめることの重要性を実感する機会となった。